

# 沖縄八重山文化研究会会報

第 200 号

発行 沖縄・八重山文化研究会  
事務局 沖縄県立芸術大学付属  
研究所 波照間永吉研究室  
那覇市首里金城町三一六  
Tel. 〇九八・八八二・五〇四三



第二〇〇回沖縄・八重山文化研究会（会長三木健）は、二〇〇九年四月十九日、県立芸大付属研究所内で開かれ、鈴木耕太氏が「組踊『執心鐘入』の諸本について」と題して発表した。

## 組踊「執心鐘入」の諸本について

鈴木 耕太

### 一、組踊の台本について

組踊は王府の中で台本を持って生まれた芸能である。したがって作品とともに台本も伝承されるはずである。しかし先の大戦で多くの台本が消失し、王府で上演された際の台本も、現在では一八六七年の『尚家所蔵本組踊集』しか残っておらず、それ以外にまとまったものは伊波普猷の『琉球戯曲集』が有名である。現在、一番古い台本は宜野座村に伝わる一八一八年のものであり、それ以外の現存する多くの台本は明治末期〜戦前のものである。それらの組踊の台本（台本数本を纏めた「組踊集」）は王

府の資料からきちんと書写されたということが確認できない。また、各台本で台詞や音曲の若干の違いがみられる。台本をもとに演じられる組踊にはなぜこのような台本の違いがあるのか。そして組踊の作品は前記した上演台本以外の、地方に伝えられた組踊集に数多くの台本がみられ、また御殿・殿内に伝わる組踊集の中にも多く見られる。だが、いずれもどの組踊集より書写したか明記していないのである。よって王府の台本に近い台本はどれかを校合することにより系統を明らかにする事は組踊の作品を考える上で必要不可欠なことである。これまででは一九八六・八七年に行われた沖縄県教育委員会の組踊調査で、本県にどのくらいの組踊作品と組踊集が残されているのかが明らかになった。だが、この時の調査では発見された組踊集の系統などは明らかにしておらず、調査で明らかにされた組踊集と最近明らかになった組踊集は以下のように分類される。

①王府側の組踊集：一八六六年『尚家所蔵本組踊集』・一九二九年出版の伊波普猷

の『琉球戯曲集』（一八三八年に行なわれた尚育王の冊封の上演資料をもとにしたもの）『琉球戯曲集』と同系統の台本は『台湾本琉歌大観』『琉球国要所抜粹』にも一部納められている。

② 御殿・殿内・土族の尚勇していた組踊集：一八九一年『今帰仁御殿本』・一八九八年『恩河本小祿御殿本組踊集』・書写年代不明『伊舎堂用八所蔵組踊集』などがある。

③ 地方に伝わった組踊集：『宜野座村宇古知屋本』『久志村所蔵本』など。首里から地方にもたらされた、あるいは地方で書写したと思われる組踊集。収録作品の中にはその地方にしか見られない組踊も多い。

二、「執心鐘入」の諸本

「執心鐘入」は沖縄県教育委員会の調査によると、十六の組踊集に収録されていることがわかる。調査以外に発見した二台本を加えると合計で一八となる。今回は以下の組踊集に収録されている「執心鐘入」を対象として校合を行った。

- 『今帰仁御殿本組踊集』一八九一年（以下「今帰仁本」）
- 『恩河本小祿御殿本組踊集』一八九八年（以下「恩河本」）
- 『兼島信備所蔵本組踊集』一九〇六年（以下「兼島本」）

『琉球脚本組踊集 下巻』一九二〇年（以下「琉脚」）  
 『比嘉信三所蔵本組踊集』一九二二年（以下「比嘉信三本」）  
 『校注 琉球戯曲集』一九二九年（以下「戯曲集」）

『台湾本 琉歌大観』一九三三〜四一年の間（以下「琉歌大観」）（\*注1）  
 『渡久地活版所 組踊集 第一編』一九三六年（以下「渡久地活版本」）  
 『工四附組踊集』一九四一年（以下「工四本」）

『伊舎堂用八所蔵組踊集』書写年代不明（以下「伊舎堂本」）  
 この中で書写年代が一番古いのは「今帰仁本」であるが、王府の台本を書写した「戯曲集」を底本とし、底本と同台本を書写したと思われる「琉歌大観」は、その所収されている作品の分量の面から対校本とした。（\*注2）

三、「執心鐘入」の諸本の異同

前記の台本を校合した結果、台詞・音曲の異同は以下の通りである。

- (一) 底本の表記と諸本の表記が異なるもの  
 ① 冒頭の若松の出羽である金武節が「伊舎堂本」のみ「恩納節」と表記されている。
- ② 宿の女の干瀬節の歌詞「里と思は、のよで／いやでいふめ宿。／冬の夜のよすが

／互に語やべら。」↓「伊舎堂本」「互に語ら」となっている。

④ 宿の女の入羽の「干瀬節」↓「比嘉信三本」のみ「干瀬節 下句より述懐となる」となっている。

他三例

(二) 底本にはみられず諸本にみられるもの  
 ① 「琉歌大観」は作品を「第一幕」「第二幕」の二つに分けている。

② 「琉脚」には他の台本にはみられない「若松人家に立ち寄り」「家の内より女の声にて」などのト書きがみられる。

③ 若松の台詞「知らぬ」が「伊舎堂本」にはみられず、代わりに「浮世恋てすや／聞見ちんしらぬ／頼て此事や／ゆるちたふうれ」という台詞になっている。

④ 小僧（二）の台詞「あたままるめても／慈悲知らぬものや／石か朝夕さの／薪木ごころ。」のあとに、「戯曲集」「渡久地活版本」「比嘉信三本」以外の組踊集で、小僧一に相当する人物の台詞で、「とうくゆるち見せらう」がみられる。

他四例

(三) 底本にみられるが、諸本にみられないもの  
 ① 「着付」と「南表の幕内にて」などの幕の指定のト書きは底本と「琉歌大観」に

はみられるが、その他の組踊集にはみられない。

②最初の「六番 此時組踊札懸る／執心鐘入 拍子木打候得ば歌躍出る」と、最後の「附いのりに取付候時、笛太鼓小鼓にて拍子有る。橋掛にをさまる。」は他の組踊集にいつさいみられない。

③小僧(二)の台詞「推参な小僧めが」の「めが」が諸本にはみられない。

四、まとめと今後の課題

底本の「着付」と出入り幕のト書きは「琉歌大観」以外にみられない。同じ羽地本を書写とされているこの二つの組踊集の方が、上演に即した組踊台本であることが言える。

それ以外の組踊台本では「琉脚」「渡久地活版本」はト書きが多くみられ、上演の内容をより具体的に反映している台本といえる。組踊集の出版年がそれぞれ大正九年・昭和十一年と新しいので、明治期の舞台を反映したものである可能性も考えられる。

また「伊舎堂本」には作品の冒頭の音曲が「恩納節」と表記されていたり、底本にない若松の台詞がみられたりと、他の台本との関係性が薄いため、底本とは別系統の組踊台本と考えられる。そして底本として使用した『校注 琉球戯曲集』にも若干検討が必要な部分(「あの鐘よ」や「ほれたか

く」の台詞、「とうくゆるち見せらう」の台詞など)があることがわかった。

「執心鐘入」一作品を校合しただけでも、前述のような異同からわずかながらの系統がうかがえる。今後さまざまな作品を細かく校合することで、組踊台本の今まで明らかにされてこなかった関係性や、系統をも明らかにすることができるであろう。

注1 台湾本『琉歌大観』は真境名安興が中心になって編纂したものである。もともとの「琉歌大観」の概要そのものは、明治四十二(一九〇九)年十二月七日付の沖縄毎日新聞の記事に「琉歌大観の出版」と題してその内容が紹介されているものが一番古い。台湾本は真境名安興の死後、台北帝大が沖縄に筆耕を派遣して写したものである。筆者年代は不明であるが、真境名安興死後(昭和八年)から昭和十六年四月二十六日付大阪毎日新聞の沖縄地方欄の「帰って来い、琉歌大観―神奈川県で流浪の旅」と題する記事が書かれる前に書写されたと思われる。よってここでは書写年を昭和八(十六年)とした。なお、台湾本『琉歌大観』については琉球大学付属図書館報「びぶりお」三十巻一号(一九九七年一月)に拠った。台湾本には「執心鐘入」と「銘苺子」の二作品しか納められていないため。

注2

「ミンサー全書」刊行  
「あざみ屋」の記念事業

文化短信

「ミンサー全書」刊行

「あざみ屋」の記念事業

あざみ屋・ミンサー記念事業委員会(波照間永吉委員長)がこのほど市内ホテルで八重山ミンサーのルーツや文化、歴史などを網羅した書籍「ミンサー全書」の完成を発表した。初版は一〇〇〇部を発売する。同事業は、二〇一一年に創業四〇周年を迎える株式会社あざみ屋(新賢次代表取締役社長)の記念事業の一環として、〇七年に実行委員会が立ち上げられ、ミンサー関連資料の収集・展示を目標に事業を進めてきた。波照間委員長は「今後、現存するミンサーの各種織物や文献などを集め、ミンサー博物館をつくっていききたい」と述べた。全書は「ミンサーとは」「八重山の歴史と民俗」「ミンサーの現在と未来」「技法とデザイン」の4章に分かれており、県立芸術大学名誉教授の祝嶺恭子氏や県美術家連盟に所属している石垣博孝氏、県立博物館・美術館主任学芸員の與那嶺一子氏、西表島紅露工房の石垣昭子氏など専門家と関係者の二五人が著者を務めている。

新刊紹介

市の無形民俗文化財を記録

『南風ぬ島カンター棒舞・獅子舞定本』

石垣市新川に伝わる「南風ぬ島カンター棒舞」は、頭に赤い髪のカツラを冠り、棒を持って集団で舞う、いわゆる「南風ぬ島」系の踊りである。一七〇〇年代に新川村に伝えられたとされる。一九九〇（平成二）年一月に石垣市の無形民俗文化財に指定されている。

本書はその保存に努めてきた「南風ぬ島カンター棒保存会」が、「後世へ正しい継承と発展に寄与することを目的として」（入嵩西清佐会長）発刊された。

棒舞の手順を図入りで解説した第一章・棒の舞、獅子舞について解説した第二章、銅鑼や太鼓の打ち方などを解説した第三章・鳴物、衣装や小道具を開説した第四章などからなるが、第六章の写真では、棒舞の所作について、カット写真で見せている。

本書の「南風ぬ島カンター棒の由来」によれば、由来はこうである。昔、中国からデッターという青年が石垣島に漂着した。勤勉で島の人にもよく尽くしたので、新川一六番地に住むことを許された。ある日、デッターが崎枝海岸を歩いていると、どこか

の国から漂着船があった。デッターは手厚く介抱し、長い間世話を見た。漂着民は感謝の気持ちで「棒踊り」を舞い、それを教えて島を去った。島の女性と結婚したデッターは姓を「唐真」と名乗り、「棒踊り」を家宝として子孫に伝えていた。四代目の子孫のヤマタの時、新川村が創建された（一七五七年）のを機会に、村の伝統芸能として伝えていくことになったという。いかにもありそうな話である。

（保存会刊、B5判、一一四頁、非売品、連絡先・入嵩西正治編集委員長・石垣市新川一五一、☎098082・5104）

イノシシの狩猟文化を探究

『第二回カマイサミット』西表  
―資料報告書― 同実行委員会編

二〇世紀最後の亥年の一九九五年一〇月、沖縄本島の国頭村奥で「イノシシサミット」が開かれた時、二回目を二〇〇七年に西表島で開催されることがきまり、同地で研究者や現役の猟師たちによる狩猟活動やイノシシの利用文化について紹介が行われた。本冊子は、その時の報告書である。

「カマイ」とは、西表島の方言で、イノシシのことである。同じイノシシでも石垣では「ウムザ」と呼んでいて、言葉の成り立ちが異なるようだ。「サミット」は十二

月十五・十六日の二日にわたって開かれ、初日は研究発表とフォーラム、二日目は祖納の猪垣巡検であるが、本冊子には、研究発表の抄録とフォーラムのあらましを収録している。研究発表には本土や、台湾の民俗学者・黄智慧氏らも参加、現役猟師として台湾からは、パイワン族のサキヌ氏が参加した。研究発表は、次の通り。

黒沢弥悦「リュウキュウイノシシは一つのグループとしてまとまるのか?」、富岡正人「日本および北東く東南アジアの頭蓋資料からみたイノシシ・ブタの多様性」、山崎京美「島嶼部から見たイノシシと縄文人との関わり」、島袋綾乃「八重山の先史遺跡から出土するイノシシ」、島袋正敏「イノシシを通して人・自然の関係性を探る」、野林厚志「中国農村社会におけるブタの多面的価値」、石垣金星「祖納部落における狩猟文化の伝統」、サキヌ・黄智慧「台湾パイワン族の狩猟方法について」、中谷淳「地域と狩猟方法の違いから見た狩猟による地域個体群への影響」、蛭原一平・花井正光「西表島の猟期捕かく個体からみる狩猟と地域個体群との関係」、田浦紀子「千葉県南房総市におけるイノシシによる農作物の被害状況」、名島弥生・北条芳隆・河野裕美「西表島・網取遺跡出土の動物骨資料」（「第二回カマイサミット」西表）実行委員会刊、A3判、四六頁、非売品）

\* 次回は6月21日 講師：金武正紀氏「八重山の古村落」予定